次第 なりめくくしる志よきのさつく

下 宿りはかくをたのむ世 口半詞 是非

鳥江の聖急乃くきのま是ゆくは

ゞ月もなき我るまと帰ら家語よ

の庵主人 下ヲ のへみ嶺の小篠原

上ヲ うつりやまし鳥江野入り

名かるおのこ心なくぞ我を

のはとや思ひくらむ産なれは
色に咲く花の数をつかもちて
ごんまは深い嫁く飛て枯野に
ひたく虫の音もあはれなり世を
まつ物あはれく 便船をまち
時うひへこそうひるまそは
蒼茫となめ雁のふしを修寺舟

この里お茶あれはいて男廉
鳴る風ふまく飛んもひめ家
面白きよいあやきこと野をを
舟の遊をまちて 萩乃ほのく流
露乃たまの なかへ便船申さう
なにみ あみ召神く人 船賃ハ人
船ハきつときき老の船賃乗せ

たる身を願くは シテ〽船便なくとも
こゝの渡はかなひはまじ
ワキ〽いや中にもさすがわたりて浅瀬を
渡しかけるまでは シテ〽なふ〳〵
其理ハ中流舟をめさら飛ん
〽乃里をなを涉し此葉前ハ遠とも
流よ立しませ候〽とゞる絆へと

さしける露の玉こめし秋
笹乃ゞく繁くとふかきやどの
月をや舟よの移りて天乃川
たな渡しゝて七夕のつくに
一夜をまつる鵲よ涼風ふけまさ
渡のをとゞなとふちの舟海士
小船水音なしつり遊くよまの乃

ぞ薬を服かえ津ゆめさら於て是
河咒申さは何りまおく
シテ
＼さん候是ハ美人草と申て候へ
あは花なれは　ワキ＼あら面白や河咒
申謂なれ美人草と使申はう
シテ
＼これ昔項羽の后虞氏と申し
ひとの力哉なふ甘なしなかなか

姫ひし をとぎ里あ墓の中より
こめ候へ墓塚より生出たる
花なれはとて美人草とは申也
ワキ
＼さらさら項羽高祖のたたかひの
様を詳存知たりしに物語
候へ　シテ＼さらは語てきかせ申
申は更し　物語　さても項羽高祖の

戦ひ七十餘度に及ふといへども
はじめて項羽まけたまはず
一度も高祖の利なかりしに
項羽の終にはうしの垓下にて
項羽をせはめはしく四面に漢の
兵をあつめ我が虞氏ハおもひに
騅うしろでかりしをきせとの

終ふ又望雲騅と云馬ハ一日に
千里をかけ留るなき其重れ
運敵ははぬまたびさをおけ津る
一あしも時のこれ時須羽を
ちつきりすぎまよわせ津
まきとおわ大ぞてうふ呂馬童
がりくひと徒るを高祖よさくさ

浪よりふかき津乃よ風となく聲
かりぬとふりしの郡ぶ乃舟路
をの浅りしぞとも便なく残
清乃ずつしぶを志流め哀をあ京
づ物之情殺者三界不淨惡趣
昔ハ月へ雲すまるゝ三尺念之
撥面四の月耀絆響かし

古松下乃のは昔路くとして
仙郷を理業鳳の雲君横きる風
出立ハ天津乙女乃志づへ那
音妓樂を奏し流ゞく夢路
つくしひく琵琶の四絃よ
と義路群を出く横たえ枕んの
さめきたるゆめぐく流

苦患やな 虞氏を思ひにたえ
かねて くしハ思ひに堪かね
て高楼に登りて木はしい
きなりしなみさの雨の身を投
げなしくあはれ 項羽も
虞氏の御神と象身乃 朱盛く
草葉の露も浪とも小消えて

かなしきおもひの浅き海も
ほこも此なみひてゞ身をたく
そのわに口惜の夢枕
あらぬ飛か風 ありし飛ふしあ
項羽の身形 衰若き項羽の
おほ乃立あゆのかはゞ求方を
みゝほ骨粉に降しよ揚くほ

なかなかおもき罪ときけ大腹立
ゆるし給ふとあはれなりしつき
出つゝさかなきちりはきとはなさ
投捨まさきのひ寿命せまちくひ
とるくふおもしろう一幕
いき絶ひなき我をはんぬ大
鳥江の里あとの如中ほちわとう

まわあるほ